

これからの地域デザインの あり方の模索、研究

前 田 博 子

(2024年3月6日受理)

Exploring and researching the next stage of regional designing

MAEDA Hiroko

はじめに

私たちの暮らす福井県には豊かな自然と産業がある。RENEWをはじめ福井県内で企画実施されているイベントの多くは伝統工芸を通して地域の魅力を伝えており、県外からの参加者も多い。一方、本学の学生は「福井には何もない」と言う。しかし、本学の学生は主として県内就職を希望しており、地元に残って生活を営み続けるにもかかわらず、地域特性を活かしたイベントや企画を知らず、余暇を県外のテーマパークやショッピングモールで過ごしている。決して何もないわけではないのに「何も無い」と言ってしまう若者世代へRENEW等の地域創生を主としたイベント・企画の浸透を深めるためには「行ってみる」「やってみる」きっかけづくりが必要である。そのきっかけとしてRENEWへの参加、体験を実施する。加えてデザイナーや地域おこし協力隊として働く本学卒業生の仕事内容や余暇の過ごし方を伝えてもらう。身近なところにも私たちの暮らしを豊かにするためのデザインや仕掛けがあることを知り、地域との関わり方や盛り上げ方の選択肢を増やした上で自分に合った関わり方、盛り上げ方を選択できる学生を育成するため「企業研究Ⅱ」を開講している。

授業（企業研究Ⅱ 1・2年開講_分散集中）の大まかな流れは以下の通りである。

- ① 地域デザインについての調査、研究
- ② センパイ（本学卒業生）との意見交換会
地域デザインを体験、理解した上でものづくり産業と視覚デザインとの関わり、地域イベントへの参画についての講演とワークショップ参加
- ③ RENEWへの参加、工房体験（10月6日－8日）
- ④ 報告会の実施
- ⑤ RENEWプロデューサーとの意見交換会
- ⑥ レポート「主体的に地域創生に参加する私の方法」提出

今回は②③⑤についての報告を主とする。

センパイ（本学卒業生）との意見交換会

既卒者（センパイ）の前田桃子は卒業研究「モモ・バショ・ヒト ももこによる人の集う場の考察」を礎に地域には様々な得意を活かしながら活躍する大人たちがいることを知り、場がもたらす地域活性の魅力を地域住民と共に共有している。前田は卒業後一般企業で働きながら、週末になると地域のイベントに参加者もしくはスタッフとして参加していた。結婚を機にそれまで勤めていた会社を退職し、現在は鳥取県琴浦町で地域おこし協力隊となっている。2023年9月19日、前田桃子を招き、地域イベントへの参画についての講演とワークショップを本学にて

実施した。ワークショップは《#みんなももこになる似顔絵》(図1, 2)と《ももこを頭の片隅に置いて帰ろう》(図3)の2種類を用意してもらった。《#みんなももこになる似顔絵》は参加者との対話を通してその人らしさを引き出しつつも、最後に仕上がるのは「ももこ」というキャラクターになってしまうという対話型ワークショップである。《ももこを頭の片隅に置いて帰ろう》は筆者が保持している古布に「ももこ」をスクリーンプリントした生地を前田が琴浦から持参した古布や資材を縫い付け、「ももこ」に装飾していく手芸アートである。どちらも公民館活動を主としているため、人が集い手を動かしながら会話を楽しむ場づくりが自然と成り立つ仕組みがある。金銭的な利潤を求めるものだけではなく、人と人との交流がどのような効果を見出していくのかを考察するきっかけを提示してくれた。

他にもデザイナーの松浦えり、佐藤美羽、フリーカメラマンの荒井里緒奈(りいちゃん)が今の仕事や休日の過ごし方など、自身の暮らしがデザインや地域とどのように繋がっているのか、関わっているのかをわかりやすく伝えてくれた。



図1 #みんなももこになる似顔絵 WS風景 図2 #みんなももこになる似顔絵



図3 ももこを頭の片隅に置いて帰ろう WS風景

福井を代表する地域のデザイン「RENEW」への参加

RENEWについてはホームページに掲載されているものを引用する。

「RENEW (リニュー)」は、福井県鯖江市・越前市・越前町で開催される、持続可能な地域づくりを目指した工房見学イベントです。会期中は、越前漆器・越前和紙・越前打刃物・越前箆笥・越前焼・眼鏡・繊維の7産地の工房・企業を一斉開放し、見学やワークショップを通じて、一般の人々が作り手の想いや背景を知り、技術を体験しながら商品の購入を楽しめます。また、RENEWでは狭義の産業観光だけにとどまらず、社会的意義の高い活動を行う全国各地のローカルプレーヤーが産地に集うマーケット「まち／ひと／しごと -Localism Expo Fukui-」も開催予定。国内最大規模となる一大イベントを、ぜひご堪能ください。¹⁾

2023年10月6日～8日に実施されたRENEW2023を学生たちは文字通り堪能している。各自、どの工房を回るのが、何を食べるのか、職人への質問等事前学習を踏まえ工房体験やショップリサーチをしている。計画を立ててはいるものの参加者や職人からの話を聞いて予定にはない場所に「行ってみた」学生も多かった。友人と一緒に参加する者もいれば、家族と一緒に参加する者とさまざまであった。報告書からは工房見学、ワークショップ、職人への取材、ショッピング、ローカルフード等十二分に堪能したことが何れも充実した時間を過ごしていた。

大阪知愛はその日の出来事を「家に帰ってもわくわく感が止まらなかった」と振り返っている。また長谷川もえは以下のように感想を述べている。

今回のイベントに参加してみて比較的身近にあるモノづくり産業の実態、技術(工夫)、思いを知ることができました。企業によってそれぞれ異なる点があるので、参加していてためになることがたくさんあり、とくに環境に気を配っている会社が多いと感じました。また企業訪問の



学生からのRENEW提供写真

他にローカルフードの体験、他県の企業についても知る機会がありましたが自分が知りえなかった新たな知恵を頭に入れることができ、とても勉強になりました。²⁾

また吉川心も以下のように感想を述べている。

かなりたくさんの工房やショップをまわらせてもらってすごく楽しかったし、自分が考えていた伝統工芸とは全く違うものが多かったので驚きました。古風な、昔ながらのものを大切にしつつ新しいモノも取り入れていて、消費者の興味を惹きつけていると思ったし、ただ、モノを売る、お金を稼ぐことだけに固執しているのではなく、人に伝統工芸をどのようにどう伝えるかをも考えていて、すごく見ていて興味が沸いたし、もっとこの機に福井の工芸品について知りたいと思いました。

身近なところにこんなに興味を持てるものがあるなんて思いもしなかったし、これまで東京や大阪、名古屋など都会に行きたいとか都会のご飯が

食べたいとかいろいろ理想がありましたが、改めてこのRENEWに行ってみてから福井の魅力をやより深く知れたし、都会とは違う、福井なりの魅力があるなと気づくことができました。

県外から職人になりたい！働きたい！と思って福井に来てくれている人もインタビューした人の中にいて、福井に来てくれて、福井に住んでくれて、福井の工芸品を受け継いでくれていると考えたらすごく嬉しい気持ちになりました。このように人が来てくれるということは魅力があるからなのだろうなと思いました。

自分たちはまだまだ福井のすべてを知れていないなと実感しました。そしてもっと福井のイベントに参加して、新しい福井についての発見ができればいいなと思いました。³⁾

RENEWの地域活性と本学学生との関わり方

フリーライターの甲斐かおりはRENEWの特性を以下のようにまとめている。

とはいえ、RENEWはあくまで期間限定のイベントにすぎない。どこまで実質的な売上に影響があるかといえば、現状、イベント3日間の売上2700万円以外、数字としての成果は見えにくい。ただ取材をしてわかってきたのは、このイベントはただのマーケットイベントではないということだ。目的は出展者の売上アップではなく「産地の持続性を高める」こと。イベントを機に気運を高めて、産地を時代に合わせてアップデートし、若い世代との接点を取り戻す。あくまでキャッチコピーは「来たれ若人、ものづくりのまちへ」なのだ。実際にイベントを通じて「あかまる隊」と呼ばれるボランティアの活動が活発で、年間を通じて地域内外の若い層が多く関わりコミュニティ活動が続いている。これには3年目から関わるようになる森一貴さんという、事務局をまわしてきた秀逸な人物が大きく寄与している。森さんが用意した「森ハウス」というシェアハウスを入り口に、あかまる隊に入ったり、鯖江へ移住する若者が増えていく。⁴⁾

加えて、森一貴はRENEWが用いた可視化手法を以下のように説明している。

この方法は可視化の手法のなかでも、負担も大きい一方で、インパクトも最も大きい方法であるといえる。この手法は当然ながら、他の産業観光イベントでも採用されている。しかしRENEWでは産業観光イベントに留まらず、「産地の合説」により地域外の若者が就職するチャンネルを拓いたり、「あかまる隊」により外部の人々が関わる余地を生み出したりと、例年新たな試みが続けられている。すなわち、異なる可能空間の可視化を毎年繰り返すことによって、地域内外の人々が各々の関心をもとに参加・実践できる枠組みを創出し続けている点に、RENEWの実践の特徴があるといえるだろう。⁵⁾

授業で参加した学生のその後の行動は各人に委ね

られている。しかし、知らなかった学生が興味を持つようになった。今回買えなかった物を来年買うという目標を掲げている者、来年は違う友達と参加したいと思っている者もいる。スタッフ側として参加したいと思った学生は少ないにしろ、スタッフや職人が見せてくれたRENEWという景色に来年の自身の参加の方法が可視化されており、それは実現可能な事象であったと言える。

昨年度「企業研究Ⅱ」を受講した小形文子は本年度RENEWスタッフとして参加していた。「この法被に憧れていて」と自慢気なところが印象的であった。(図4) 展示されていた商品には小形がアイデアを出したものもある。小形の趣味でもあり、卒業研究であった消しゴムハンコを使ったワークショップをRENEW会期中にアルバイト先の丸廣意匠で実施するはずが、ワークショップとしての仕組みが難しかったため見送り、断念したという。その後、消しゴムはんこを使ったトレイ(図5)や弁当箱(図6)が商品化されることになる。アルバイトという立場でも地域創生を担う経験ができる。そこで小形に将来どのような職に就きたいのか、どのような人になりたいのかと問いを投げかけると「地域創生」「伝統工芸の継承」といった言葉は出てこなかった。どちらかと言えば自身の作ったものを他者に認めてほしい気持ちが際立っていた。



図4 RENEWスタッフとして働く小形



図5 トレー(丸廣意匠)



図6 弁当箱(丸廣意匠)

ただ、「そこにいる人たちが好きなんです」という言葉には情熱や研鑽だけでなく、他者への配慮や共有しようとする職人の姿勢を感じ取っているかのよう

地方雑誌発刊と福井観光発信展覧会の実施



「Craft Invitation」 2023年12月18日

「d design travel 33 FUKUI」 2024年3月25日

上記2冊の地方観光雑誌が発刊されたことにより、福井県内外に限らず福井を知った人たちの来県が期待される。2024年3月16日北陸新幹線延伸に伴い県外からの観光客が増える。他方、県内の若者がこれらの風潮を追い風として福井の可視化された魅力に気づき、これらを持続するための関わりが「作り手」「伝え手」「暮らす」と多様である。

越前鯖江のものづくりに魅せられ「作り手」を志す者、商品の未来や暮らしに想いを巡らせ「伝え手」として尽力する者。なかには、とにかくこの地域が大好きで心向くままに暮らす者も。多様な形で移住者が増えるこのまちは、さらなる面白みで溢れる可能性に満ちています。⁶⁾

2023年1月20日－3月3日に金津創作の森でふくいのクリエイターにより実施された「出発展」も上記2冊の雑誌同様にふくいの良さが多分に案内してあった。3つを比較しても似通った点が多く、福井らしいパッケージが最新化され「ふくいの可視化」に成功したと言えるだろう。「何もない」はずのふくいは「よそ者」によって魅力が発掘され、それらを地元住民や職人たちが産地の持続性を高めようとしている。

これからの課題

受講当初、学生たちは福井のものづくりについては「眼鏡」と「越前和紙」、ことづくりについては「フェニックスまつり」「三国花火」と答えていた。中にはRENEWを知っている学生もいたがほとんどの学生が知らなかった。しかし最後のレポートには福井のものづくりについては「メガネ、越前和紙、越前打刃物、越前焼、箆笥、繊維、若狭塗、めのう細工、漆器、木材加工」、ことづくりでは「RENEW」を筆頭に「敦賀港イルミネーション、フクイコーヒーフェスティバル、メガネフェス、千年未来工芸祭、つつじ祭り、そば祭り、越前市サマーフェスティバル、ONE PARK FESTIVAL」多くのイベントやお祭りが加えられていた。ただ学生本人が主体的な企画者を目指すようなことはなく「ためになった」「参加してよかった」という一過性イベントへの感想にすぎなかった。引き続き、彼女たちが福井に興味を持ち、関わり方を模索するとは断言できないものの、「知る」「楽しむ」といった一定の成果はあったと言える。



図7 新山直広氏と学生

2023年12月13日にRENEW実行委員長の新山直広氏による講演と意見交換会を実施した。(図7) 学生たちはRENEWを振り返りながらRENEWの成り立ちやこれまでの流れを実体験を踏まえて振り返ることができている。新山氏の講演を聞いて大阪知愛は以下のように感想を述べている。

“TSUGI”という会社は、私が参加したRENEWにも関わっており、未来にこういうのができたら、こういうのがあったら、という自分たちの発想やイメージ商品をかいて終わるだけという、夢を見て終わるだけでなく、実際に作って

みること、会議をしている人々に評価やアドバイスをもらう事など、どんな物事に対しても、挑戦できるものには、必ず挑戦していくことが大切だと学びました。今回の新山さんのお話を聞いて、挑戦することは、一つだけでなく、自分がやりたい、興味を持ったものなどすべてに該当するのだなと思いました。特に、検定や就職活動に関係してくるものだなと思いました。新山さんから聞いたお話を生かして、今後の自分の物事に活かしていきたいと感じました。また、私は、今回初めて行ったRENEWに興味を持ち始めたので、次のRENEWにも参加したいと思います。次のRENEWは自分が参加できなかったところに参加してみたいです。⁷⁾

また、三田村奈保も以下のような感想を述べている。

新山さんが立ち上げたRENEWに参加して私が感じたことは福井の技術のすばらしさです。私は、高校卒業まで県外で育ったので福井にくる機会は親戚に会いに、年に2,3回程で福井についてあまり知らなかったのですが、RENEWを通していろいろな方と話したり、ワークショップに参加したりして福井の魅力をたくさん学ぶことができました。こんなに伝統工芸品や、ものづくりの技があることを初めて知りました。だんだん、福井のものづくりに興味がある人や、福井の伝統工芸品をもっと知りたいと思う人が集まれる場所や実際に活動できる場所ができているということを知って、私も福井の技術や伝統工芸品を守り、未来につないでいきたいと思いました。RENEWは、工房で職人さんが作る姿を実際に見ることができ、ワークショップやトークイベントなど普段は絶対に経験することができない貴重な機会で、ものづくりを通して生まれる人と人とのつながりを感じることができるイベントだと思います。新山さんの話を聞いて、これから自分も積極的に地域イベントに参加し、今まで自分が興味を持っていなかった分野にも視野を広げていきます。また、就職

活動では福井のものづくりや伝統工芸品をPRすることのできる企業や、地域の人とのつながりをもった企業を探すなど幅広い視点で企業研究できるようにします。⁸⁾

現在「よそ者」と言われた新山直広や森一貴によって越前鯖江市域は活性化してきた。「よそ者」と扱われながらも自身の考えに賛同する職人たちと共に伝統工芸や産地の発展に寄与してきた。その成果もあって消極的だった職人たちも積極的に参加するようになったと言う。自分たちでは見つけられない魅力を「よそ者」が見つけてくれた。その魅力を再認識したからこそ地元の人々の関わりや加わり方が変容してきている。その変容の中になら、学生の未来も組み込めるかもしれない。

「おもしろい地域には、おもしろいデザイナーがいる 地域×デザインの実践」のあとがきに編者の坂本大祐が以下のように述べている。

これは、やはり地域という環境が、デザインに作用していると言っていいと思う。地域は、都市ほどに均質化が進んでおらず、まだその土地に根ざした活動が、それぞれに可視化され、本書に収録されているから、このような多様なあり方になるのだ。⁹⁾

また次第に、その他の地域にも伝播して、地域同士が影響し合い、よりよいものが生まれる。ここで言う道具とは、その土地での暮らしが顕在化した象徴のようなもので、それをその土地で使うことがうれしくもあり、誇らしくもある。そんな、その土地らしい暮らしが滲み出たような道具の交換が、それぞれの地域間で起こること。これからは地域と経済のそんなあり方を想像している。¹⁰⁾

私たちの住む福井は都市ほどに均質化が進んでいながらこそ、その地域で育った学生が多様な方法で参加する方法がある。均質化していない福井は特異的な「こと」や「物」を出発点とすることができる。

特異性に気付けるのは「よそ者」なのかもしれないが、その特異性を活かす、伸ばす、持続させることは地元で働く人々の得意とするところであろう。

RENEWには、現地の生産者をはじめ、各地の学生が集まるサポートチーム「あかまる隊」や、全国のクリエイターが出演する『まち／ひと／しごと』なども開催され、さまざまな立場から“ものづくりの今”を刺激し合う場となっている。さらに、『来たれし若人、ものづくりのまちへ』というRENEWのスローガンには、職人やデザイナーのみならず、小売店、飲食店、宿泊施設に関わる人や、そうでない人も含めたさまざまな役割を持つ人が集まり、多様性のある町へと成長することが「持続可能な地域づくり」に繋がるという思いが込められている。RENEWは、その未来に向けた“みんなの仕組み”として、これからも変化していくだろう。それは、変化を恐れず挑戦し続けてきた産地の姿勢そのものだ。¹¹⁾

学生たちが「関わる人」や「そうでない人」として持続的に関わるためには長期にわたる考察、模索が必要である。暮らしの道具を礎としたデザインと地域特性を活かした地場産業は多様な要素が組み合わせることで賑わいにつながることをRENEWが提示してくれている。身近なところにも私たちの暮らしを豊かにするためのデザインや仕掛けがあることを学生たちは実体験を通して知ることができた。地域との関わり方や盛り上げ方の選択肢を増やした上で自身の性質や立場を活かしてどのような関わり方、盛り上げ方があるのかを引き続き模索してほしい。

謝 辞

本科目及び本研究は未来協働プラットフォームふくい推進事業（福井版PBL支援分）の助成を受けました。

註

1) <https://renew-fukui.com/> (2023.03.03最終閲覧)

- 2) RENEW報告書そのまま抜粋
- 3) RENEW報告書そのまま抜粋
- 4) <https://shinsho-plus.shueisha.co.jp/column/ニッポン継ぎ人巡礼/20347> (2024.03最終閲覧)
- 5) 森一貴「産業観光イベント「RENEW」と自律的な地域変容のためのデザインー内発的發展論および Ezio Manzini の理論をもとに一」ふくい地域経済研究 第34号/2022
- 6) Craft Invitation 一般社団法人SOE/2023
- 7) 提出レポート原文まま
- 8) 提出レポート原文まま
- 9) 新山直広 坂本大祐編著「おもしろい地域には、おもしろいデザイナーがいる 地域×デザインの実践」学芸出版社/2022
- 10) 新山直広 坂本大祐編著「おもしろい地域には、おもしろいデザイナーがいる 地域×デザインの実践」学芸出版社/2022
- 11) 「d design travel FUKUI」D&DEPARTMENT PROJECT/2024